弘前大学教育学部紀要　第88号：11～18（2002年10月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 88：11～18（Oct. 2002）

北京皇城とその周辺地域における清末以後の機能変化

The Functional Changes of the Beijing Huangcheng and Surrounding Districts After Late Qing Dynasty

後　藤　雄　二*
Yuji GOTO*

論文要旨

本研究は歴史的都市北京の都市構造を分析する出発点として、中心部に位置する旧皇城とその周辺地域における清末以後の機能変化を明らかにすることを目的としている。

清代の北京には４重の城壁が存在した。内城の中央には「皇城」があり、紫禁城、庭園、官衙、倉庫、満州族の住宅などが存在した。内城の南には外城が建設された。この皇城内とその周辺地域を紫禁城、皇城、清代の官衙地区、東交民巷使館区に分け、各機能の配置とその後の変化、および、上述の各地域に存在した機能が現在立地する地域と現況について分析した。

歴史的都市である北京では、皇城とその周辺地域においても機能変化がみられるが、都心地域が中心部に存在しないなど、歴史的制約と文化財保護などにより機能立地上大きな影響が見られるといえる。

キーワード：北京、都市構造、歴史的都市、機能変化

１．はじめに

Gan(1990)は北京の都市構造の形成要因として、歴史的要因、都市計画などをあげそれらについて概説している。また、北京にはＣＢＤが存在しないとも述べている。譚(2002)は北京の都市計画について、明・清時代については比較的早い時期から研究されてきたのに対して、辛亥革命以降については最近ようやくまとまった史料が発表されはじめ、研究も断片的・実録的なものが多いと述べている。北京の都市構造に関する地理学的研究については、近年多くの研究がおこなわれてはいるものの、現在の都市構造に与えた歴史的要因については、王(1997)の研究などをのぞけばまだ多いとはいえないと思われる。現在の北京の都市構造、とりわけその中心部については歴史的制約が強く残存していると考えられる。

日本の都市、特に旧城下町では中心部に都心地域が形成されているが、北京の中心部はどのような変遷をたどってきたのであろうか。そこで本稿では、北京の都市構造を分析する出発点として、歴史的都市北京の中心部に位置する旧皇城とその周辺地域における清末以後の機能変化と現況について、都市計画をも含めて検討することを目的としている。

２．研究視点と資料

本稿では、歴史的都市である北京の分析に、日本での研究方法を適用したいと考えた。それは、横尾(1987)の視点と城下町研究者の矢守(1970)の視点でである。

横尾は、旧城下町弘前の都市構造への歴史的制約・歴史的再編について分析している。また、矢守は城下町の濠の位置・範囲を基準として城・侍屋敷地区・町屋地区などの機能配置とその変化のモデルを作成した。北京には後述するように４重の城壁が存在した。北京の城壁は凸であり、城下町の濠は凹であるが、同様に防御施設である。また、これらは土地利用の境界線という意味をも有していたといえよう。そこで北京の、後述する「紫禁城」・「皇城」の城壁の位置・範囲を基準として、歴史的制約・歴史的再編に注目しながら各機能の変化を分析するという日本の旧城下町に対

＊弘前大学教育学部社会科教育教室
Department of Social Studies, Faculty of Education, Hirosaki University

する研究視点が成立するのではないかと考えた。

分析の資料は、古地図と文献である。古地図については、近年、清末・民国時代の古地図が復刻されている。しかし、1950・60年代の北京の詳細な地図は公刊されなかったようである。1976年発行のマル秘扱いの北京地図帳でも市街地の範囲と道路網は知ることができるものの、土地利用については不明である。そこで、対象とする時期は清末・民国時代と現在が中心となる。現状については、最新の地図の利用に加えて現地調査を実施した。また、滞在中にデジタルカメラで撮影した数千枚の画像も資料として使用した。

3．北京の概況

はじめに北京の歴史と現況について概述する。

現在の北京の都市構造の基礎は元代、大都の建設にはじまる。現在でも北部に大都当時の「土城」（土の城壁）と護城河が残されている。また、横丁を意味する「胡同」はモンゴル語の「井戸」に起源があるといわれ、当時の道路網の一部は残されている。

明の建国後、永楽帝の時代の15世紀初めに南京から遷都し、大都の城壁を南に移動する形で城壁が建設された。これが「内城」といわれるものである。内城の中央南部には紫禁城が建設され、その外側には皇城の城壁が建設された。16世紀半ばには内城の南に外城が建造された。これにより、北京は内側から、紫禁城（宮城）、皇城、内城、外城の４重の城壁で囲まれることになった。外城は本来内城の周囲を取り囲む計画であったが、財政的な問題などにより南部だけとなり、本来は「回」の形となるはずであったが全体として凸の形となった。この凸の内側を城内、外側を城外という。城内の典型的な住宅も周囲を壁で囲む形態で、これを「四合院」というが、このように北京は何重もの壁で囲まれる閉鎖空間を形成していた。

旧城内には低層建築物が多く緑も多い。また、この地域には「歴史文化保護区」が設定されている（実,2001）。旧城内の南北の中軸線上にある鐘楼から見ると内城には伝統的「四合院」が残り、城外には高層建築物が建設されているというコントラストをなしている。もちろん、旧城内にも高さ制限はあるものの多くの高層建築物が存在する。

中国の時代区分ではアヘン戦争から中華人民共和国の成立の期間を近代と区分し、アヘン戦争以前を古代、中華人民共和国の成立以後を現代と区分する。このうち、本稿で主として扱う近代の主要事項について概述する。1901年、義和団事件後の「辛丑条約」により、現在の天安門広場の南東、「東交民巷」に「使館区（公使館地区）」が建設された。1912年には中華民国が成立し、北京は皇帝の都から近代都市の首都となる。1924年、清国最後の皇帝溥儀が紫禁城から退去させられる。1928年、蒋介石による北伐が完成し、北京の北洋軍閥が駆逐され国民政府が成立すると1928年に首都機能は南京へ移動する。1937－45年の期間は日本軍が北京を占拠するが、日本の敗戦後、1945－49年は国民党が支配する。1949年はじめ、内戦に敗れた国民党は平和的に北京を退去し、1949年、中華人民共和国の成立で再び首都となる。この間、大きな戦災を受けることはなかった。

現在、北京市の面積は1.68万㎢で日本の岩手県（1.53万㎢）よりやや広い。2000年現在の人口は1,278万人である。北京の主要道路網についてみると３本の環状道路と放射状道路からなる。このうち二環路は凸字型で旧城壁の跡に建設された。三環路の外に建設された四環路は2001年に全通し、五環路も一部開通している。

4．清末の各地区とその後の変遷

図１は清代の北京城を示したものである。現在の二環路の内側が旧城内で北京市街地の中心部を占める。内城には９つの城門が、また、外城には７つの城門があった。これらの城壁は1960年代に地下鉄環状線の建設に伴って取り壊された。内城の中央南部に紫禁城がある。その外側にあったのが皇城で、現在の南の長安街、北の平安大街にはさまれた地区である。天安門は紫禁城ではなく皇城の正門であった。紫禁城の正門は午門である。「皇城」には、紫禁城、庭園（北海・中海・南海など）、官衙、倉庫、清代には満州族の住宅などが存在した。紫禁城の中心を通る南北の中軸線で非対称であるが、これは紫禁城の西に北海・中海・南海があるためである。皇城の城壁は一部を除いて取り壊されたが、2002年には東の城壁跡に皇城根遺跡公園としてその城壁の一部が復原され、歴史･文化都市としての整備が進んでいる（写真１）。明・清代には皇城の南に官衙（官庁）地区がおかれていた。

以下では、この皇城内とその周辺地域（特に南

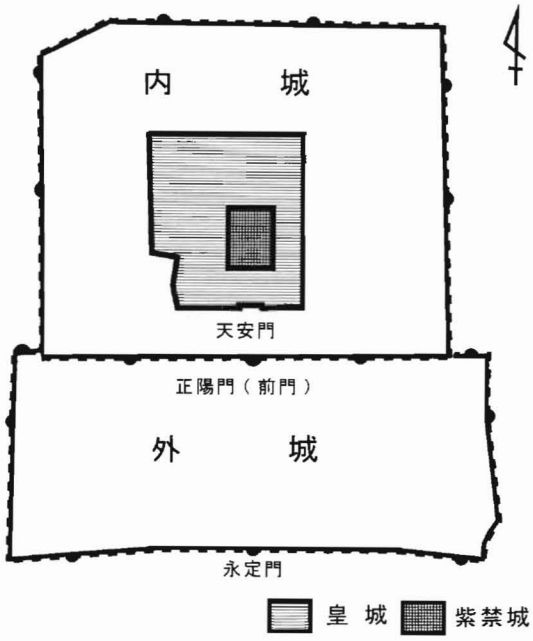
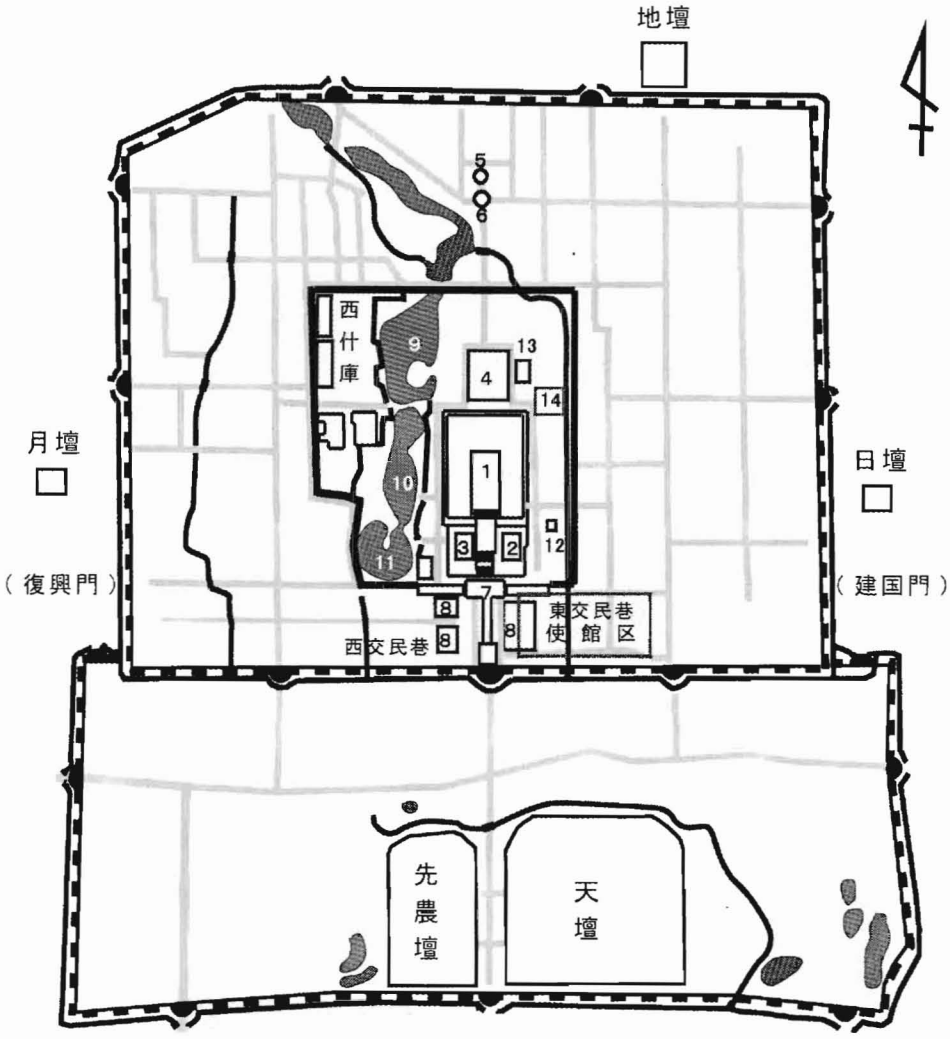


図１．清代の北京城

写真１　皇城根遺跡公園



1. 紫禁城　2. 太廟　3. 社稷壇　4. 景山　5. 鐘楼　6. 鼓楼　7. 千歩廊　8. 官衙　9. 北海
10. 中海　11. 南海　12. 普渡寺　13. 京師大学堂　14. 北京大学

図２．近代の北京中心部

侯「北京城市歴史地理」図5−4をもとに作成

※　建国門と復興門は1937年に内城の城壁にあけられた。ただし、門の名称は改称後のもの。

側）を紫禁城、皇城（紫禁城を除く）、清代の官衙地区、東交民巷使館区に分けて、現在の都市構造への歴史的要因を分析する。具体的には、清末の機能配置の説明、近代的都市機能の付加とそれらの立地による機能地域の変化、近代において対象地域に立地していた各機能の現在の立地状況などについて分析する。図２は清代の北京の地図上に、近代をも含めて主要建築物と地名などを記載したものである。

(1). 紫禁城

紫禁城は大きく２つの地区に分けることができる。南部にある外朝は皇帝が儀式などをおこなう場所であり、太和殿などの建物がある。一方、北部にある内廷には皇帝が政治をおこなう建物、日常生活を送る建物、皇后などの後宮がおかれた。日本の近世の江戸城と比較すれば、外朝は江戸城の「表」、内廷は「中奥」・「大奥」に相当するといえよう。

1911年の辛亥革命後、外朝は皇帝溥儀の退位時(1912年)に、また、内廷は1924年の溥儀の退去以後に故宮博物院となり、建築物は周囲の城壁・濠（筒子河）と同時に保存され、現在は一部を除いて公開されている(写真２)。以上のように紫禁城は、横尾(1987)の分類によれば、「城下町による制約のもとで機能が全く変化した地域」と同様の地区ということになる。近代以後の旧城郭の跡地利用と共通する面もある。

なお、紫禁城の南には天安門の東に皇帝の先祖を祭る太廟があり、西には土地の神と五穀の神を祭る社稷壇がおかれていた。現在、太廟は労働人民文化宮となり、社稷壇は孫文を記念する中山公園となって公開されている。

写真２　景山から見た故宮

(2). 皇城

次に、紫禁城を除く旧皇城内について説明する。この地区には紫禁城、庭園（北海・中海・南海など)、官衙、倉庫、清代には満州族の住宅などが存在した。

中南海とは紫禁城の西に位置する北海・中海・南海のうち、中海と南海をあわせた地域である。中南海には、1928年の遷都以前には北洋政府の総統府、新中国成立後も国務院（日本の内閣に相当）などが設置され政治・行政の中心的機能が立地し、毛沢東など要人の住居もあった。この地区は紫禁城の内廷の機能と類似しているといえよう。紫禁城（故宮）の北に位置する景山と北海は公園となり、市民に開放されている。

以上のように故宮、中南海、北海・景山公園と後述する天安門広場をも含め、北京の中心部には広大な公的空間が形成され、都心機能の集中が阻害されたとみなすことができよう。

清末の皇城内には、1898年創立の京師大学堂(北京大学の前身）が開設された（写真３)。この位置は皇族の邸宅跡である。後に北京大学として皇城内に北京大学文学院などが建設された（写真４)。北京大学のキャンパスは、現在、市街地北西部にある。皇帝時代には皇城の北西部に西什庫という10の倉庫がおかれたが、その跡地は北京大学医学院などに変化した。皇帝時代の公的な土地利用が現在でも公的な土地利用としてつづいているといえよう。近くには天主教北堂もある。民国末年の地図によれば、旧皇城内には北京市政府、図書館などがおかれていた。

清代に城壁で囲まれていた皇城は、皇帝退位後の1910年代はじめに、皇城の城壁に南池子や中南

写真３　京師大学堂跡
景山公園の東、沙灘後街にある。

海の南などに門があけられ、さらに天安門周辺、中南海周辺など一部を残し、1920年代に城壁は取り壊された（写真５）。

このように北京の４重の中で最初に皇城の城壁が撤去された。内城・外城の城壁の取り壊しは、1960年代の地下鉄環状線建設に伴うものである。皇城の城壁の撤去により、故宮・中南海や政府関連の建物を除く地域には、民家・商店などの侵入が開始した。日本の城下町についていえば、凹の防御施設としての濠が埋められたことに相当するといえる。住民が居住したことにより、廟が学校に利用されている（写真６）。

写真７は故宮の南東にある普渡寺という清代にはラマ教寺院（明代は王府）であった寺の山門である。奥が山門で手前に住民が倉庫を建設したものである。寺の本堂は南池子小学校として利用されていた。撮影した2001年11月には普渡寺を文化財として復原するため、周囲の民家の取り壊し作業が行われていた。写真７には「取り壊し」を意味する漢字が見える。住民は規定の移転費用を受領して転居をする。同様に旧皇城北西部の西什庫にある教会周辺では、教会を文化財として整備するため旧敷地内の中学校を北へ移転し、移転先の民家を取り壊す計画が2001年に発表された。

以上のように、1920年代に皇城の城壁が撤去され、一般住民がすでに生活をしている。しかし、現在、旧皇城内などでは、一部を都市計画により保護することが実施されている。これにより都心機能の大規模な侵入はみられていない。

(3). 清代の官衙地区

明・清代には内城の正門、正陽門と皇城の正門、天安門の間には皇帝の広場、「千歩廊」があり、その東西に官衙地区が設置されていた。中華人民共和国の成立後、千歩廊と官衙地区の跡には天安門広場が建設され、その周囲には人民大会堂、毛主席紀念堂などの大建築が建設された（写真８）。この地区は皇帝時代の紫禁城外朝の地域とみなすこともできよう。

写真４　旧北京大学跡
皇城根遺跡公園の一部として「五四運動」のモニュメントがおかれている。

写真６　凝和廟跡を利用した北池子小学校
故宮の東、北池子大街にある。

写真５　南池子の門
天安門の東、東長安街の北側にある。

写真７　普渡寺の山門
故宮の南東にある。

中華民国の成立後、首都の行政機能は城内に分散的に設置されたが、1928年、南京への遷都の結果、行政機能は北平市（遷都後改名）の機能のみとなり、大規模な行政地区は形成されなかった。新中国成立後、国家の行政機関は復興門外にある程度まとまっているものの、北京市のものも含め行政機関は旧城内外に分散的に立地している。写真９は朝陽門外の「外交部」であるが、この北に「文化部」、南には「司法部」がおかれている。

千歩廊の西の西交民巷には、清末・民国時代には金融・業務機能が立地していた。例えば大清銀行、供電公司、自来水公司などである。この地区では、社会主義国成立をへて、現在、これらの建物は他に転用されている（写真10）。社会主義国成立時には、民国時代と比較して金融・業務機能が低下したといえる。これらにより、北京の中心部では田辺（1974）の術語によれば、機能的に「負の都市化」が進行したといえる。

改革開放後の現在、銀行は市街地に分散的に立地している。しかし、復興門内の中国人民銀行（中央銀行）を含め金融管理の中心として計画的に金融街を建設中である（写真11）。これは2005年にほぼ完成するで予定である。完成後には約300社、約10万人が就業することになる。

現在、業務機能は主として城外に分散的に分布している。同時に、東三環路と建国門外大街が交差する地区（「中国国際貿易中心（センター）」とこの北にある「京広中心」）を中心として、ここでも計画的にＣＢＤの建設が開始された（写真12）。

(4). 東交民巷使館区

義和団事件後の「辛丑条約」で現在の天安門広場の南東、「東交民巷」に「使館区」が建設された（1901年）。ここには各国の公使館・軍隊駐屯地・銀行などが設置され、一般の中国人は通行できなかった。現在でも旧横浜正金銀行は中国民生銀行として（写真13）、また、ベルギー公使館跡は紫金賓館として建物が残されている（写真14）。この地区は、東城区の愛国主義教育基地に指定されてい

写真８　天安門広場

写真10　旧中国農工銀行
西交民巷にある。現中国全国新聞工作者協会。

写真９　中国外交部
右側が外交部、暗い部分は旧城内。

写真11　復興門内にある金融街
中央には古代貨幣のモニュメントが見える。

る。

使館区の建設に伴い、皇城の東に王府井の商業地域が形成され、北京では前門、西単と共に商業の中心地区となっている（写真15）。最近、王府井地区の南端には「東方広場(Oriental Plaza)」という業務と商業の複合ビルが建設された。

1945年、日中戦争で日本が敗戦すると使館区は国民党が接収し行政地区を計画した。しかし、国共の内戦がはじまり計画は中断した。現在、この地区には北京市政府、最高人民法院、国家安全部・公安部、北京市安全局・公安局など国家と北京市の行政機関がおかれている。しかし、これらは行政機関の一部のみである。

現在、大使館地区は城外の東部、三里屯・建国門外などに集中的に設置されている。周辺にはレストランやマンションなど関連する土地利用が付加している。

5．まとめ

東京は江戸城を中心として発展した城下町江戸が基礎となっている。江戸城西丸跡は「皇居」となり、本丸跡は公園（皇居東御苑）として公開されている。東京は明治維新以後、首都でありつづけ首都機能も増大しつづけた。日本では、江戸城の周辺に広い敷地をもつ「大名屋敷」が存在した。これらの跡地は、明治維新後土地利用の変化はあるものの、東京の都心（行政・業務機能）を形成する敷地を提供した。皇居周辺の旧大名屋敷跡に、はじめに官庁地区（霞が関の中央省庁地区）、後に丸の内が業務地区となり、都心を構成する中心商業地区は「日本橋」から「銀座」に移動し、東京の中心部には都心部が形成されている。

一方、歴史的都市の北京では、現在、旧皇城とその周辺地域においても機能変化はみられるが、中心部に紫禁城・天安門広場などの広大な公的空間が存在する。

皇城の城壁は北京の４重の城壁の中で最初に撤

写真12　国貿橋の業務地域
東三環路と建国門外大街が交差する地域。

写真14　旧ベルギー公使館
現紫金賓館。

写真13　旧横浜正金銀行
現中国民生銀行。

写真15　王府井の新東安市場

去され、民家などが侵入した。しかし、中南海などには政治・行政などの機能が存在している。清代には皇城（天安門）の南に官衙地区があった。清末・民国時代にはその跡に業務街・金融街の形成はみられたが、社会主義国の成立後「負の都市化」がみられたことなどにより都心地域の形成は見られない。改革開放後、これらの機能は分散的に分布しているが、現在、都市計画により金融街・ＣＢＤが建設中である。1901年、使館区の形成とそれに関連する機能地区の付加がみられた。1928年の南京遷都により首都機能が失われ、北平市の機能のみとなり行政機能の低下がみられた。中華人民共和国成立後、旧使館区に一部の行政機能が立地した。しかし、これらは集中せず旧城内外に分散した。また、中心部に都心が形成されていない要因として文化・歴史都市とするための文化財保護政策の影響も大きいといえる。

筆者は2001年２月から12月までの10ヶ月間、文部科学省の在外研究員として中国北京市の北京大学で調査・研究に従事した。研究の機会を与えていただいた文部科学省・弘前大学教育学部とともに北京大学滞在中にご協力をいただいた都市・環境学系の李国平先生・柴彦威先生ならびに大学院生の皆様に対して心より感謝を申し上げます。なお、本稿の骨子は東北地理学会2002年度春季学術大会で発表した。

参考文献

木内信蔵(1939)：北京の都市形態概報　地理学評論,15,212-233
陣内秀信ほか(1998)：「北京　都市空間を読む」　鹿島出版会,245頁
田辺健一(1974)：都市化の分類　東北地理,26,240
村松　伸(1999)：「図説北京　3000年の悠久都市」　河出書房新社,112頁
山崎　健(1988)：北京市の都市構造と都市問題　佐賀大学教育学部研究論文集,35-2,37-59
矢守一彦(1970)：「都市プランの研究」　大明堂,438頁
横尾　実(1987)：弘前の都市構造への歴史的制約　東北地理,39,302-315
王　彬・徐秀珊(2001)：「北京地名典」　中国文聯出版社,687頁
王　均(1997)：近代北京城内部空間結構的歴史地理研究　北京大学博士論文,50頁
侯　仁之主編(2000)：「北京城市歴史地理」　北京燕山出版社,539頁
実　天(2001)：従歴史走向未来　中国国家地理,488,82-91
譚　縦波(2002)：北京の都市計画　植田政孝・古澤賢治編「アジアの大都市　5北京・上海」　日本評論社,237-303
Gan,Guo-hui(1990)：Perspective of Urban Land Use in Beijing　GeoJournal,20-4,359-364

(2002.7.31受理)